第３節　教育方法

１．現状の説明

（１）教育方法および学習指導は適切か。

〈１〉大学全体

本学では、教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を開設するが、授業での教育効果を上げるために、大学教務委員会が中心となって、教育方法を改善し、綿密な学習指導ができる体制を構築してきた。

教育方法の改善に関しては、まず単位の実質化が挙げられる。学部については、大学学則に「授業科目の単位数は、1 単位の授業時間を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業における教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して､次の基準により計算するものとする」と単位計算方法を明記し、講義と演習については 15～30 時間の授業を 1 単位とし、実験、実習および実技については 30～45 時間の授業を 1 単位と計算する **(4-7 第 18 条)**。ただし、卒業論文、卒業研究、卒業制作などは学修の成果を評価して単位数を定め、文学部音楽芸術学科の個人指導による実技授業は 5～8 時間で 1 単位として計算している。この内容は、『履修要覧』にも記載されており、学生にも周知されている **(4-9 共通 p.3)**。

前記の単位計算方法に基づき、本学では単位の実質化に取り組んできた。まず授業時間については、半期 15 回の 90 分授業を確保しており、休講した場合は、履修支援センターが補講の実施チェックと督促を行い、補講実施率は、大学教務委員会でも報告されている **(4-28 pp.2-3)**。その結果、2012 年度では休講に対する補講実施率は 97.3%となっている。試験については、15 回授業とは別に第 16 回を試験期間とし、筆記試験やプレゼンテーション試験、実技試験などを実施している **(4-28 pp.10-11)**。さらに、授業時間外に必要な学修については、学生が授業外でも学習するよう、授業担当者に学習課題や学習をシラバスの「課題／教室外の学習」欄に提示することを求めている **(4-29)**。授業時間内と授業時間外の学修を合わせることで、単位制度が求める学修を確保できる体制が整えられている。

このほかに、学生が適切に授業科目を履修するために、本学では CAP 制を導入して 1 年間に履修登録ができる単位数の上限を定めている。その上限は「金城学院大学履修規程」によって定められ、一部の学科を除いて、多くの学科で 1 年次 42 単位、2 年次以降は 49 単位までの履修登録を認めるが、卒業年次には上限を定めていない **(4-9 共通 pp.5-6)**。

教育方法の改善として、本学では教育環境の整備にも取り組んできた。そのひとつがクラス規模の適正化である。各授業の履修者数上限は原則 120 名であり、上限を超えた場合は抽選を行う **(4-30 p.5)**。必修科目など一部のクラスは、別に履修者数の上限を定めており、上限を超えた場合は臨時増コマを申請し、適正なクラス規模で授業を行うことができる **(4-31)**。

このように、適正なクラス規模をできるだけ確保する努力をしているが、学部学科の事情により、履修者数上限の 120 名を超えることも生じている。その場合は、授業アシスタント制度を活用することができる。この制度は、履修者数が 121 名以上の科目を対象に、学生を授業アシスタントとして雇用し、資料配付、提出物回収、出席チェック、授業中の巡回などの授業補助を依頼するものである **(4-28 pp.4-5)**。このように、本学では、学生

が授業に集中できる教育環境を整備する努力を続けている。

学習指導については、すべての学生に『履修要覧』を配布し、さまざまな教学事項について周知している。特に、入学時には、各学科で新入生オリエンテーションを行い、カリキュラムの説明や CAP 制の周知などの履修指導を行っている。それ以後も、在学生オリエンテーションを半期に一度行い、アドバイザーが成績単位修得通知表を配布しながら、学習指導を行っている。

アドバイザー制度は、本学の学生支援において重要な位置を占める。そこには、学習指導も含まれるが、アドバイザーは修学支援、生活支援、進路支援など多面的な支援を行っているので、その詳細は第 6 章に譲ることにする。

意識調査学生アンケートには、授業内容や進め方に対する満足度（「満足している」「どちらかといえば満足している」）が含まれているが、82.4%の学生が肯定的な評価をしており、本学の教育内容・教育方法に満足している状況がうかがわれる **(4-11 問 24)**。一方で、授業時間外の学習時間についても尋ねているが、1 日あたり 1 時間以下が 70.3%を占めており、授業時間外の学修については、その必要性が学生に十分伝わっていないようである **(4-11 問 27)**。

〈２〉文学部

文学部では、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、日本語日本文化学科では、講義 137 科目、演習 17 科目、実験・実習 16 科目を開講しており、英語英米文化学科では、講義 104 科目、演習 57 科目、実験・実習 2 科目を開講しており、外国語コミュニケーション学科では、講義 93 科目、演習 107 科目、実験・実習 7 科目を開講しており、音楽芸術学科では、講義 55 科目、演習 27 科目、実験・実習 50 科目を開講している。また、適切な教育を行うため、履修科目登録については、4 学科すべて 1 年次に 42 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限として定めている。

①日本語日本文化学科

日本語日本文化学科の特色ある教育方法としては、茶道、華道、狂言、香道の専門家が担当する「日本文化実習Ａ～Ｄ」があり、礼儀作法や立居振舞を学ぶことで、伝統文化に触れることができる **(4-20 学部 pp.18-19)**。また、「日文キャリア」では、学科卒業生の話を聞くことで、学生が教員や図書館司書など卒業後の自分をイメージできるように工夫している **(4-20 学部 p.21)**。

②英語英米文化学科

英語英米文化学科の特色ある教育方法には、英語統合カリキュラムを導入し、コアテキストを使用し、「話す」「聞く」「読む」「書く」を統合した教育がある **(4-32 p.25)**。その中でも、「Teacher-Student English Interview」では、外国人教員 1 人が受講生 4 名にインタビューすることで、英語による的確な応答ができることをめざしている **(4-20 学部 pp.81-83)**。また、英語スペシャリスト養成プログラム、エアラインプログラム、キッズ・イングリッシュ・プログラムにより、英語を活用するキャリア形成を支援している。

③外国語コミュニケーション学科

外国語コミュニケーション学科の特色ある教育方法の 1 つに、「海外日本語教育実習」があり、提携大学で日本語授業を見学した後で、実際に授業を行っている**(4-20 学部 p.216)**。

また、「金城シネマ」では、2 限連続授業を実施し、実際に映画に触れながら、作品の背景を知り、自分で作品分析ができることをめざしている **(4-21)**。

④音楽芸術学科

音楽芸術学科の特色ある教育方法の 1 つに、「ピアノアンサンブルＡ」があり、セントラル愛知交響楽団の協力を得て、ピアノとヴァイオリンのデュオやピアノトリオの共演を授業で行う **(4-32 p.42)**。また、「音楽鑑賞Ａ・Ｂ」では、管弦楽曲やオペラなどの鑑賞を通して、音楽の構造や背景を理解することをめざす **(4-20 学部 p.245-246)**。

〈３〉生活環境学部

生活環境学部でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、生活マネジメント学科では、講義 83 科目、演習 13 科目、実験・実習 2 科目を開講し、環境デザイン学科では、講義 64 科目、演習 7 科目、実験・実習 42 科目を開講し、食環境栄養学科では、講義 56 科目、演習 5 科目、実験・実習 21 科目を開講している。履修科目登録については、生活マネジメント学科では 1 年次に 42 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限とし、環境デザイン学科では 1 年次に 48 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限とし、食環境栄養学科では 1 年次に 46 単位、2 年次に 60 単位、3 年次に 49 単位を上限として定めている。

①生活マネジメント学科

生活マネジメント学科の特色ある教育方法としては、AFP 認定研修プログラムを導入し、指定科目を履修および修了すると、実務経験なしで 2 級ファイナンシャルプランニング技能試験の受験資格を得られる。その中でも、「生活マネジメント特論Ｆ」は、野村證券の現職社員が講師となり、金融業界の現場における知識と経験を学ぶことができる **(4-22 学部 p.24)**。

②環境デザイン学科

環境デザイン学科の特色ある教育方法として、「インテリア造形実習」があり、工芸材料に関する理解を深め、革による造形表現と手織り技法を習得することをめざす **(4-22 学部 p.55)**。また、「環境デザイン特別研修Ａ・Ｂ」では、アメリカやヨーロッパなどでデザイン実習を受講したり、美術館や建築物を見学することで、デザインに対する感性を高めることをめざす **(4-32 p.57)**。

③食環境栄養学科

食環境栄養学科の特色ある教育方法としては、必修科目である「基礎化学」を「アドバンスト」と「プライマリ」にレベル分けし、化学の初年次教育を行っている **(4-22 学部 p.77、p.84)**。また、管理栄養士資格課程に関する科目は、1 クラス 40 名の少人数教育を行っており、教育効果が高い学習環境を確保している。

〈４〉現代文化学部

履修科目登録については、国際社会学科と情報文化学科が 1 年次に 42 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限とし、コミュニティ福祉学科が 1 年次 48 単位、2 年次 55 単位、3 年次 49 単位を上限として定めている。

現代文化学部の特色ある教育方法は、改組後も継承発展しているので、国際情報学部と

人間科学部の項で述べるが、現代文化学部当時の初年次教育に関する取り組みは、『金城学院大学論集』で発表されている（**4-33 pp.48-60、4-34 pp.17-38**）。

〈５〉国際情報学部

国際情報学部国際情報学科でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、講義 108 科目、演習 32 科目、実験・実習が 2 科目を開講している。履修科目登録については、1 年次に 42 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限として定めている。

国際情報学科の特色ある教育方法としては、1 年次の必修科目である「KIT Ａ・Ｂ」が挙げられる（**4-23 学部 p.8**）。「KIT Ａ」では、海外研修の基本的な課題を学んだ上で、韓国、台湾、タイ、インドネシア、カナダ、アメリカなどの行き先を決定する。「KIT Ｂ」では、行き先によってクラス分けし、訪問先と研修の課題に関する学修と研修準備を行い、春休みに研修を行う。研修の成果は、帰国後に報告を提出して評価している。

また、EXP（Expert Program）として、JTB と提携した観光プログラムをはじめとして 8 つのプログラムによって、将来を見据えた専門性を身につけることができる（**4-32 p.81**）。

〈６〉人間科学部

人間科学部でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、現代子ども学科では、講義 80 科目、演習 49 科目、実験・実習が 12 科目を開講し、多元心理学科では、講義 96 科目、演習 17 科目、実験・実習 3 科目を開講し、コミュニティ福祉学科では、講義 89 科目、演習 15 科目、実験・実習 2 科目、実技 1 科目を開講している。履修科目登録については、現代子ども学科、多元心理学科、芸術・芸術療法学科が 1 年次に 42 単位、2 年次 3 年次に 49 単位を上限とし、コミュニティ福祉学科が 1 年次 48 単位、2 年次 55 単位、3 年次 49 単位を上限として定めている。

①現代子ども学科

現代子ども学科の特色ある教育方法としては、「人間科学基礎演習」において、犬山モンキーパーク園長の講話と現地での観察を実施し、動物の親子におけるコミュニケーションを学ぶ機会を設けている（**4-24 学部 pp.40-41**）。また、面接・グループディスカッション対策や対策講座など、教員および保育士の採用試験サポートを行っている（**4-32 p.89**）。

②多元心理学科

多元心理学科の特色ある教育方法としては、ユニット制がまず挙げられる。「社会心理学」「健康心理学」「キャリア心理学」「臨床心理学」「発達教育心理学」「医療福祉心理学」の中から、メインユニットとサブユニットを選ぶことで、多角的に心理学領域を学ぶことができる（**4-32 p.99**）。

③コミュニティ福祉学科

コミュニティ福祉学科の特色ある教育方法としては、従来の社会福祉士に加え、人間科学部に移動することで、精神保健福祉士などの資格課程を充実してきた。また、初級障害者スポーツ指導員資格対応科目「福祉スポーツ実技」では、障害者と高齢者のスポーツ活動を体験し、学校での指導などに関わる技能の習得をめざしている（**4-24 学部 pp.172-173**）。

また、「手話（１）（２）」では、実際に手話を学びながら、学生に手話が言語であることを理解させている **(4-24 学部 p.171)**。

〈７〉薬学部

薬学部薬学科でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、講義 84 科目、演習 16 科目、実験・実習 12 科目を開講している。履修科目登録については、1 年次に 46 単位、2 年次から 5 年次までが 49 単位を上限として定めている。

薬学科の専門領域は、薬学教育モデル・コア・カリキュラムおよび実務実習モデル・コア・カリキュラムに記された各学習項目の到達目標達成を基準としている。そのほかの特色ある教育としては、入学時に学力試験を実施し、化学と生物に対する理解が不足している学生に対し、導入教育を行っている。初年次教育としては、「屋根瓦方式」教育と称する「薬学 PBL（１）（２）」を導入し、1 年生を小グループに分け、各グループを教員 1 名と 2 年生チューターが指導してグループワークを行っている **(4-25 学部 p.9)**。これにより、コミュニケーション能力と問題解決能力を培うことをめざしている。この取り組みについては、2013 年に日本高等教育開発協会で優れた教授法として取り上げられた **(4-35)**。また、ファンケルと提携したサプリメントプログラムを導入し、現役の社員からサプリメントについて体系的に学ぶことができるようになっている **(4-32 p.114)**。

〈８〉文学研究科

文学研究科の記述に先立ち、単位の実質化について、両研究科に共通する部分を述べておく。大学院の単位に関しては、大学院学則に 1 年間の授業日数を、定期試験などの日数を含め、35 週にわたることを原則としている **(4-36 第 12 条)**。その上で、単位計算方法として、1 単位の履修時間を教室内と教室外を合わせて、45 時間としている **(4-36 第 13 条)**。その計算方法は、講義および文学研究科の演習は、教室内 1 時間の講義または演習に対し、教室外 2 時間の準備を必要すると考え、毎週 1 時間 15 週をもって 1 単位とし、人間生活学研究科の演習は、教室内 2 時間の演習に対し、教室外 1 時間の準備を必要とすると考え、毎週 2 時間 15 週をもって 1 単位としている。

文学研究科でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。2013 年度開講科目を見ると、国文学専攻では、前期課程に講義 42 科目、演習 24 科目を開講し、後期課程に講義 12 科目、演習 9 科目を開講している。英文学専攻では、前期課程に講義 32 科目、演習 30 科目を開講し、後期課程に講義 10 科目、演習 6 科目を開講している。社会学専攻では、前期課程に講義 32 科目、演習 31 科目を開講し、後期課程に講義 6 科目、演習 18 科目を開講している。

文学研究科の特色ある教育方法としては、長期履修制度が挙げられる。社会人の場合、大学院生として十分な学習研究時間を集中して確保できないことがあるため、入学時にあらかじめ修了年限を前期 4 年､後期 6 年まで延ばして研究計画を立てることができる**(4-37 第 3 条)**。また、通訳者に必要な諸分野の知識を身につけ英語でのスピーチを可能にする英文学専攻「通訳特論Ⅱ（１）」などの専門的職業人を養成する教育を行っている **(4-26)**。また、国文学専攻と社会学専攻では、台湾淡江大学外国語文学院日本語文学系との交換留

学生に関する協定を、2011 年と 2013 年に締結しており、海外研究機関と連携した教育を行っている。

〈９〉人間生活学研究科

人間生活学研究科でも、教育目標の達成に向け、適切な授業形態を採用してきた。長期履修制度については、文学研究科と同時に導入し、社会人に対する便宜を図っている。2013 年度開講科目を見ると、前期課程消費者科学専攻では、講義 35 科目、演習 9 科目を開講し、前期課程人間発達学専攻では、講義 34 科目、演習 8 科目、実験・実習 4 科目を開講している。後期課程人間生活学専攻では、講義 11 科目、演習 33 科目を開講している。

人間生活学研究科の特色ある教育方法としては、心理臨床相談室に来訪するクライアントと実際に面接する人間発達学専攻「臨床心理実習Ⅰ」など、臨床心理士になるための実地トレーニングを行っている **(4-27)**。

（２）シラバスに基づいて授業が展開されているか。

〈１〉大学全体

本学のシラバスは、すべての学生に配布されるだけでなく、大学ホームページにも公開されており、外部から各科目の教育内容と教育方法を確認することができる。その点では、本学は教育の現状を広く公表していると言える。そのため、次年度の授業担当者にシラバス執筆を依頼する際には、冒頭にシラバスの重要性を記し、適切な記述を依頼している **(4-29)**。

シラバスは、「授業の概要」「到達目標」「授業計画」「課題／教室外の学習」「テキスト・参考書」「評価方法」からなる。「授業の概要」は教育内容を示し、「到達目標」は身につけるべき能力を示しており、学位授与方針と教育課程の編成・実施方針を、シラバスに反映させている。「授業計画」は 15 回授業の確保を示し、「課題／教室外の学習」は授業時間外の学修を示しており、単位の実質化を保証するものである。「評価方法」はパーセンテージで示され、適切な成績評価であるか確認できる。

シラバスの内容については、責任部署でチェックが行われている。共通教育科目については、開講責任のある委員会でチェックした上で、共通教育委員会で最終チェックを行っている。専門教育科目については、学科に開講責任があるため、大学教務委員会から、各学部教務委員会を通して、学科にチェックの依頼を行っている。修正の必要がある場合は、教育内容と教育方法が学生にきちんと伝わる記述になるよう、授業担当者に修正を依頼する。履修支援センターでも、すべてのシラバスをチェックしており、記載内容に不備が生じないよう努力している。

シラバスに基づいて授業が展開されているかは、授業評価アンケートによって確認できる。本学では、毎年、前期か後期いずれかに学生に対して授業評価アンケートを行っている。その中には「この授業はシラバスに沿って進められた」ことを尋ねる項目があり、2012 年度後期も、2013 年前期も大学全体で 4 点満点中 3.6 であった **(4-38、4-39、4-40)**。この結果から、おおむねシラバスに沿って授業が行われていることがうかがわれる。

〈２〉文学部

文学部では、大学全体の方針に基づき、専門教育科目のシラバスを作成している。その際には、学科から授業担当者に対して、専門教育科目における担当科目の位置づけを説明し、適切な内容と方法によって、授業を行うよう依頼している。一部科目については、授業担当者がシラバスを執筆せず、学科のコーディネータが執筆することもある。それにより、学科の方針をより反映したシラバスを作成することができる。

シラバスのチェックについては、各学科は、次年度の原稿を履修支援センターから受け取り、すべてのシラバスの内容についてチェックする。シラバスが学科のカリキュラム・ポリシーを踏まえたものになっているか確認した上で、「授業計画は 15 回授業を確保しているか」「課題／教室外の学習を指示しているか」「評価方法はパーセンテージが記され、合計 100%となっているか」など、作成の方針にそぐわないシラバスについては、学科から授業担当者に連絡し、方針に合うシラバスに修正するよう依頼している。

〈３〉生活環境学部

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学部と同じである。

〈４〉現代文化学部

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学部と同じである。

〈５〉国際情報学部

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学部と同じである。

〈６〉人間科学部

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学部と同じである。

〈７〉薬学部

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学部と同じである。

〈８〉文学研究科

文学研究科においても、大学全体の作成方針に基づき、シラバスを作成している。シラバスのチェックについては、各専攻は、次年度の原稿を履修支援センターから受け取り、すべてのシラバスの内容についてチェックする。シラバスが学科のカリキュラム・ポリシーを踏まえたものになっているか確認した上で、作成の方針にそぐわないシラバスについては、専攻から授業担当者に連絡し、方針に合うシラバスに修正するよう依頼している。

〈９〉人間生活学研究科

シラバス作成の方針を大学全体で統一しているため、シラバスの作成およびチェックについては、文学研究科と同じである。

（３）成績評価と単位認定は適切に行われているか。

〈１〉大学全体

学部の成績評価については「各科目の試験等の結果は、ＡＡ、Ａ、Ｂ、Ｃ及びＦで評価し、ＡＡ、Ａ、Ｂ及びＣを合格とする」と大学学則に明記し、別に実際に行った授業回数の３分の１以上欠席した場合は、失格とすると定めている **(4-7 第 51 条)**。評価に対する評点については、『履修要覧』に「ＡＡ」が 100 点～90 点、「Ａ」が 89 点～80 点、「Ｂ」が 79 点～70 点、「Ｃ」が 69 点～60 点、「Ｆ」が 59 点以下と明記し、学生に周知している **(4-9 共通 p.16)**。大学院の成績評価については「学業の成績は、Ａ、Ｂ、Ｃ及びＤの４級に分け、Ａ、Ｂ及びＣを合格とし、これに対して所定の単位を与える」と大学院学則に定めた上で、『履修要覧』に明記している **(4-36 第 17 条、4-19 p.8)**。

大学学則または大学院学則に基づく適正な成績評価を行うため、本学では各授業科目の成績評価の方法や基準を、シラバスの「評価方法」欄に明記している。また、教務部長から授業担当者に文書が送られ、評価に関する基本方針として、複数回の評価あるいは多面的な評価方法を用いて評価するよう依頼している **(4-41)**。さらに、シラバスでは成績評価の対象とする項目だけでなく､その割合をパーセンテージで明示するよう依頼しており、成績評価が公正に行われていることを示す根拠となっている **(4-29)**。

成績評価については、GPA 制度を導入して、その客観性と厳格性の確保し、学生の学修意欲の向上を図っている。その対象となるのは、一部の実習科目と単位認定科目を除くすべての科目である。GPA 制度については、『履修要覧』にその計算式が示され、半期ごとに配布される成績単位修得通知表に記載されているので、学生は現在どのような成績評価を受けているか数値で知ることができる **(4-9 共通 pp.16-17)**。

成績評価は、適正な手続きで学生に通知される。本学では「成績 Web 登録」が実施されており、授業担当教員はマニュアルによって成績を登録する **(4-28 pp.18-22)**。このマニュアルでは、学生データは個人情報であり、取り扱いに十分注意するよう促している。学生は自分の成績に疑義がある場合は、成績単位修得通知表の発行日より１週間以内に、履修支援センターに成績の問い合わせができる **(4-9 共通 p.17)**。成績の問い合わせに対応するため、当該学生の在学期間中、授業担当者は成績評価につながる試験やレポートなどを保管することが求められている **(4-28 p.12)**。また、成績訂正の必要がある場合には、授業担当者は「成績評価訂正願」を作成し、教務委員長または教務部長と履修支援センター職員の立ち会いの下で訂正作業を行っている。各学期の成績訂正状況については、大学教務委員会を通じて教授会に報告されており、より適正な成績評価ができるよう努力している。

本学の単位認定については、大学学則に明記されている **(4-7 第 15-17 条)**。第 15 条では、他大学または短期大学において修得した単位について、本学が定めるところにより本学における授業科目の修得とみなして単位を与えることがあると定めた上で、外国の大学

や短期大学に留学する場合には、この基準を準用することを明記している。第 16 条では、大学以外の教育施設など文部科学大臣が別に定める学修についても、本学が定めるところにより単位を与えることがあることを明記し、第 17 条では、入学前の既修得単位等の認定について、入学後の本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことがあるとする。第 15 条から第 17 条までの単位認定は、すべて合わせて 60 単位を超えないことが明記されている。

学則で認められる単位認定については、『履修要覧』により学生に周知されている **(4-9 共通 pp.18-22)**。本学では、大学または短期大学における授業科目の履修の単位認定として、愛知学長懇話会のもとで包括協定を締結している愛知県下のすべての国公私立大学に加えて、同志社女子大学との間で単位互換協定を締結している **(4-42)**。なお、同志社女子大学との間には、国内の留学先の協定も締結している **(4-43)**。外国の大学または短期大学に留学して修得した単位については、在学留学と休学留学のいずれの場合も、単位認定制度の適用の対象となることが定められており、19 の国際交流協定大学との間に単位互換協定を締結しているが、「金城学院大学学生留学規程」に基づく留学と認められれば、協定大学以外の大学についても、協定大学同様に単位認定することになる。留学による単位認定については、大学教務委員会で基準が定められており、この基準にしたがって単位認定を行っている **(4-44)**。入学前の既修得単位等の認定については、金城学院高等学校との覚書に基づき、金城学院高等学校からの入学予定者に対する高大接続連携授業を大学入学後に単位認定を行っている **(4-45)**。

これ以外に、単位認定の対象となる検定試験とその認定基準、入学前の既修得単位および編入学した学生の既修得単位の認定についても、『履修要覧』に明記されており、学生はこの記載に基づいて単位認定を申請することができる。学生の申請に基づき、各学部教授会では単位認定を行っている。

本学では、大学学則に基づき成績評価と単位認定を行っているが、その基準については『履修要覧』を通じて学生にも周知されている。一部の単位認定については、大学全体または学部で基準を定め、適切な認定を心がけている。

〈２〉文学部

文学部では、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が公正な成績評価を行っている。また、多面的な成績評価を行うため、第 3 章で述べたように、ＦＤ交流集会「テスト理論から見た成績評価」、ＦＤセッション「成績評価について」、「定期試験期間の廃止と成績評価方法の変更による授業運営の工夫」を開催し、教員間で成績評価の理解を深める取り組みを行っている。

大学全体の項で述べたように、検定試験などについて、文学部では『履修要覧』に記載される大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。外国語コミュニケーション学科については、入学時に外国語運用能力が著しく高い学生が、初級科目を受けなくても良いよう、別に単位認定基準を設けている **(4-9 学部 p.9)**。留学については、大学教務委員会の定める認定基準に則って、単位認定を行っている。2012 年度には、日本語日本文化学科では留学 2 件、英語英米文化学科では検定試験 79 件、留学 14 件、外国語コミュニケーション学科では検定試験 60 件、留学 14 件の単位認定が行われた。

〈３〉生活環境学部

生活環境学部でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行い、検定試験と留学について、大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。2012年度には、生活マネジメント学科で検定試験 1 件、環境デザイン学科で検定試験 3 件、食環境栄養学科で検定試験 2 件の単位認定が行われた。

〈４〉現代文化学部

現代文化学部でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行い、検定試験と留学について、大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。国際社会学科については、入学時に外国語運用能力が著しく高い学生が、初級科目を受けなくても良いよう、別に単位認定基準を設けている **(4-13 学部 pp. 9-10)**。

〈５〉国際情報学部

国際情報学部でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行い、検定試験と留学について、大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。2012年度には、国際情報学科で検定試験 46 件、留学 11 件の単位認定が行われた。

〈６〉人間科学部

人間科学部でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行い、検定試験と留学について、大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。2012 年度には、現代子ども学科で検定試験 4 件、心理学科で留学 1 件、多元心理学科で検定試験 2 件、芸術・芸術療法学科で検定試験 3 件の単位認定が行われた。

〈７〉薬学部

薬学部でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行い、検定試験について、大学全体の認定基準に則って、単位認定を行っている。2012 年度には、薬学科で検定試験 11 件の単位認定が行われた。

〈８〉文学研究科

文学研究科でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行う努力をしている。大学院学則では、他大学院などにおける授業科目の履修について 10 単位を超えない範囲で単位認定を認め、外国の大学院の場合にも準用することが明記されている **(4-36 第 15 条)**。文学研究科では、国文学専攻と社会学専攻が台湾淡江大学との間で交換留学に関する協定を締結しており、2011 年度には、淡江大学からの交換留学を終えた国文学専攻の学生に対し、協定に基づき 2 単位の認定を行っている。

〈９〉人間生活学研究科

人間生活学研究科でも、シラバスの「評価方法」に基づき、教員が適切な成績評価を行う努力をしている。また、文学研究科と同じく、他大学院などにおける授業科目の履修に

ついて単位認定を認めるが、実際に単位認定を行ったことはない。

（４）教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

〈１〉大学全体

本学では、学生による種々のアンケートに基づいて教育成果を定期的に検証している。まず、大学全体としては、授業評価アンケートを実施している。アンケートは、毎年前期か後期のどちらかに、すべての専任教員および非常勤教員の最低１科目授業科目が対象として行っている。直近では、2012 年度後期と 2013 年度前期にアンケートを実施している**（4-39、4-40）**。教員の取り組みについては、ほぼすべての項目で 4 点満点中 3.5 以上になっており、それぞれの授業科目で適切な方法で授業が行われていると判断できる。授業の総合評価についても、授業に対する理解、満足、興味については 4 点満点中 3.3 または 3.4 となっており、授業科目が適正な教育内容であると判断できる。ただし、学生の自己評価については、授業に積極的に取り組んだとする学生は 4 点満点中 3.3 または 3.4 となっており、ある程度の成果が上がっているが、授業以外に予習・復習を行ったとする学生は、4 点満点中 2.5 前後に止まっている。授業以外の学修は、単位の実質化において重要な部分であるが、アンケートからは、この点について十分でないことがうかがわれる。授業評価アンケートの結果は、授業担当者に返却され、各教員は授業の改善につなげている。これに加え、第 3 章で述べたように、専任教員はアンケート結果に対する分析を 2 年に 1 度行い、その報告は『VOX POP』としてまとめられている。

このほかに、一部科目については、学生に対して独自のアンケートを行い、教育内容と教育方法の検証を行っている。共通教育科目では、言語センターにおいて英語教育科目と外国語教育科目の科目評価を行っており、その結果を基に言語センター委員会で授業科目のあり方について検証している**（4-46、4-47）**。

本学では、教育方法の改善について、個々の教員の努力だけに委ねず、学部・研究科のＦＤ委員会と大学ＦＤ委員会が連携して、改善に取り組んできた。ＦＤ交流集会については、すでに第 3 章で述べたので、ここでは学科別協議会について説明する。学科別協議会は、毎年すべての学科で夏休み前後に開催される。その中では、それぞれの学科の現状を検証し、教育内容や教育方法の改善から、カリキュラム改定や改組に至るまで、幅広い議論を行っている。さらに、2013 年度からは、大学ＦＤ委員会は学科別協議会の共通テーマを設定し、その検討結果について報告を受けることになった。これにより、共通テーマに関する学科の取り組み状況を把握し、大学全体として改善につなげている。これ以外に、すでに述べたように、共通教育委員会が共通教育科目の見直しを 4 年に 1 度行っており、その教育課程と教育内容についても検証している。また、教育方法の改善については、第 1 章で取り上げた総合戦略協議会において議論され実現したものも多い。総合戦略協議会では、教育・学習システム改革作業部会や学習補助作業部会など、長期にわたって教育方法の改善に対する協議を行うことで、教職員にその必要性を共有することができ、大学全体で取り組む体制が生まれている**（4-48）**。

〈２〉文学部

学部・研究科については、第 3 章に述べたようなＦＤ講演会や授業見学の取り組みを行っている。そのほかに、毎年すべての学科で開催される学科別協議会は、教育内容と教育方法の改善に大きな役割を果たしているので、ここでは学科別協議会に限定して説明することにする。

文学部では、2013 年に音楽芸術学科が新設されたため、新文学部体制として、すべての学科でカリキュラム改定が行われた。そのため、2011 年度からは、3 学科において新体制に向けた準備が継続的に話し合われている **(4-49)**。また、2012 年度には、文学部として、共通テーマを設定し、授業外の学修時間を確保するための議論が行われている。2013 年度には音楽芸術学科が加わったが、新学科としての学科別協議会では、求める教員像が話し合われている。また、特筆すべき検証活動として、英語英米文化学科では、学科別協議会を利用して、継続的にシラバスの検証をしている。

〈３〉生活環境学部

生活環境学部では、2011 年度から生活マネジメント学科と環境デザイン学科で新カリキュラムについて検討されている **(4-50)**。この話し合いは、生活環境学部の改組に関する作業部会の議論につながっている。また、食環境栄養学科は、管理栄養士国家試験出題変更を教育課程に反映するため、学科別協議会において継続的に議論を重ねている。

〈４〉現代文化学部

現代文化学部は 2011 年で学生募集を停止し、2012 年に国際情報学部国際情報学科と人間科学部コミュニティ福祉学科が誕生した。そのため、2011 年度の学科別協議会では、次年度以降に向けた話し合いが行われている **(4-51)**。これらは、新体制が滞りなくスタートするための準備作業として行われた。

〈５〉国際情報学部

国際情報学部は 2012 年に新設されたため、2 年間の学科別協議会は、学年進行に合わせた準備とカリキュラムの検証と改善が行われている。新学部と言うことで、課題は教育内容と教育方法にとどまらず、入試や学部運営などの広汎なテーマが話し合われている。

〈６〉人間科学部

人間科学部では、課題が学科によって異なり、話し合われるテーマにも特色が見られる **(4-52)**。現代子ども学科では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭の養成を課題としており、学科別協議会でも継続的にこれらのテーマが話し合われている。多元心理学科はユニット制を特色とする学科である。そのため、ユニット分けをいかにうまく行うかを 2 年にわたって話し合っている。芸術・芸術療法学科は、音楽と美術における教育方法と評価方法を話し合っており、よりよい教育を行う努力が見られる。コミュニティ福祉学科は、2012 年より人間科学部に加わったが、より多くの社会福祉士を育成するため、国家試験への対応が毎年のテーマとなっている。

〈７〉薬学部

薬学部の学科別協議会は、ワークショップや外部講師を招いた勉強会を行っているところに特色がある**(4-53)**。毎年テーマを設定して、専門家から学ぶだけでなく、ワークショップで議論を重ねることで、教育方法の改善が学部すべての教員に共有されるようになっている。

〈８〉文学研究科

学科別協議会は、学科単位で行われるため、研究科については、教育方法と教育内容に関する取り組みを取りあげる。

文学研究科では、隔年で「学生の意識調査アンケート」を行っている。最近では、2012 年 11 月に実施し、分析結果を研究科委員会で報告した。研究科の教育内容指導体制に対する学生の評価は、おおむね良好であった。**(4-54、4-55)**

〈９〉人間生活学研究科

人間生活学研究科でも、「学生の意識調査アンケート」を実施している。最近では 2009 年に実施し、分析結果を「2009 年度　大学院人間生活学研究科　学生の意識調査報告書」にまとめた **(4-56)**。それによれば、研究科の研究内容指導体制はおおむね妥当であるとの評価であった。

２．点検・評価

●基準 4「教育内容・方法・成果」のうち「教育方法」の充足状況

適切な教育を行うため、本学では、大学教務委員会の主導により、120 名定員授業、シラバスによる学修時間の確保、留学による単位認定基準の共通化などの、教育方法の改善を行っている。また、専門教育においても、それぞれの教育方針に基づいた教育を行うため、学部・研究科ごとに教育方法に工夫を凝らしている。さまざまな課題については、毎年の学科別協議会で改善が図られている。以上の点から、本学は求められる基準を充足していると判断できる。

①効果が上がっている事項

〈１〉大学全体

単位の実質化については、15 週授業の完全実施を実現する努力をしており、そのことは高い補講実施率からも判断できる。また、シラバスを通して、適切な教育方法を実現しようとしており、授業外の学修時間確保が「課題／教室外の学習」欄として、成績評価の公正性の確保が「評価方法」欄として設けている。この欄については、共通教育委員会と学部・研究科で、すべてのシラバスをチェックしている。「2012 年度意識調査学生アンケート」問 24 では、授業内容や進め方に対して 82.4%が肯定的な評価をしており、ＣＡＰ制の実施や 120 名以下の授業を実現など、適正な教育を行うための取り組みに対する満足度

が高いことが確認できる。また、問 29②では、シラバスの満足度について、71.6%の学生が肯定的な評価をしており、シラバスが学生の授業選択に役立っていると判断できる（**4-11 問 29②**）。

教育内容・方法・成果に関する検証としては、本学では積極的な取り組みを行ってきた。共通教育部分については、大学教務委員会の活動報告や共通教育委員会の 4 年ごとのカリキュラム見直しが、教育内容・方法に関する検証に該当する。専門教育については、教育内容・方法に関する検証は学科別協議会で行われていることが確認できる。

〈２〉文学部

日本語日本文化学科では、伝統文化を体験的に学ぶ「日本文化実習」に加え、「日文キャリア」など専門性を活かしたキャリア教育を行っている。英語英米文化学科では、英語統合プログラムを導入して、英語運用能力を高めるための工夫を行っている。

文学部の学科別協議会では、3 学科とも数年にわたって新カリキュラムの検討などの話し合いが行われており、2013 年度の音楽芸術学科設置に向けて十分な準備がなされたと考えられる。英語英米文化学科では、毎年の学科別協議会でシラバスを検証しており、シラバスに基づく授業を行うために積極的な姿勢が見られる。

〈３〉生活環境学部

生活マネジメント学科では、AFP 認定研修プログラムを導入、野村證券の現職社員講師による授業など、社会からの要請を意識した科目編成となっている。

生活環境学部の学科別協議会では、新カリキュラムの検討や国家試験出題基準と授業とのすりあわせが継続的に行われており、教育内容と方法を改善していることが確認できる。

〈４〉国際情報学部

リーダーシップを持つ女性を養成するため、EXP を設置し、プログラムに社会からの要請に応えようとする姿勢が反映されている。

学科別協議会については、現代文化学部時代より、新学部の設置に向けて、入念な話し合いをしてきたことが確認できる。国際情報学科設置後も、課題解決のための話し合いが行われており、学科別協議会が検証機能として機能していると判断できる。

〈５〉人間科学部

多元心理学科では、ユニット制の導入により、さまざまな角度から心理学にアプローチすることが可能となり、特色ある教育課程となった。

学科別協議会では、各学科とも資格試験や採用試験に対する対策と検証を重ねており、教育成果を上げるために、十分な話し合いをしていると判断できる。特に、学部を移動したコミュニティ福祉学科は、新たな学部における学科の中長期方針を話し合っており、より良い教育に向けた検証活動を行っている。

〈６〉薬学部

「薬学 PBL」や「CBL」 での教育活動は、学生の問題解決力、コミュニケーション能

力を養う上で効果をあげている。特に「薬学 PBL」は、学外からも高い評価を得ており、優れた教育方法を採用した科目として評価できる。また、ファンケルとの提携など、学生に社会に目を向けさせようとする姿勢も、社会からの要請を意識した取り組みと判断できる。

学科別協議会においては、外部講師による講演とワークショップを組み合わせて開催することで、その年のテーマについて深く掘り下げようとしており、教育内容と方法に対する積極的な姿勢が確認できる。

〈７〉文学研究科

長期履修制度は、社会人に対する便宜を図る点で、社会からの要請に応えた教育方法の改善と言える。国文学専攻と社会学専攻では、台湾淡江大学との交換留学生に関する協定を締結し、海外研究機関と積極的に交流しようとする姿勢が見られる。また、英文学専攻においては、通訳者養成のための科目を開講しており、社会の要請に応え、専門的職業人を養成しようとする研究科の理念を具体化した教育課程となっている。

〈８〉人間生活学研究科

長期履修制度に対する評価は、文学研究科と同じである。人間発達学専攻では、心理臨床相談室を活用し、臨床心理士になるための実地訓練を行っており、専門的職業人養成に直接結びつく教育方法と評価できる。

②改善すべき事項

〈１〉大学全体

「2012 年度意識調査学生アンケート」問 27 では、授業時間外の学習時間について 1 日あたり 1 時間以下が 70.3%を占めており、単位の実質化が十分に果たされていない。公正な成績評価がなされているか、検証されていない。成績評価の公正性を、大学全体で担保する体制を構築する必要がある。

学部の教育成果については、学科別協議会として大学全体での検証体制が構築されている一方、研究科の教育成果については、それぞれの研究科に検証活動をまかせており、活動結果を大学全体で確認することができていない。研究科についても、学部と同じような検証体制を構築する必要がある。

〈２〉国際情報学部

国際情報学部は実践性を重視する教育を行っており、学外との交流がきわめて多いが、交流をバックアップする体制が不十分である。

〈３〉文学研究科

『履修要覧』の記載内容については、人間生活学研究科との違いが大きいので、両研究科で統一するために調整する必要がある。

文学研究科における成果に関する指標には、「学生の意識調査アンケート」を除いて、

継続的な取り組みが見られない。授業評価や検証のための協議会など、学部と同じ検証活動の導入を検討すべきである。

〈４〉人間生活学研究科

人間生活学研究科における教育内容と方法に対する検証には、継続的な取り組みが見られない。授業評価や検証のための協議会など、学部と同じ検証活動の導入を検討すべきである。

３．将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

〈１〉大学全体

今後も、大学教務委員会で、受講者人数や補講実施率を確認し、単位の実質化を担保していく。シラバスのチェックについては、記載内容の確認だけでなく、実際にシラバス通りの授業が行われているか検証できる仕組みを検討していく。

〈２〉文学部

音楽芸術学科の設置にともなう文学部の教育の変化について、それぞれの学科別協議会を通じて検証するとともに、ＦＤセッションなどで、今後の文学部の方向性について話し合っていく。

〈３〉生活環境学部

生活環境学部のうち、生活マネジメント学科と環境デザイン学科では、改組作業部会を中心にしたカリキュラム改定の準備が始まっており、社会からの要請に応え、現場での体験を重視する教育方法を充実させていく。食環境栄養学科では、国家試験出題基準と科目をすりあわせしながら、管理栄養士に必要な知識を効果的に身につけられるようにする。また、ほかの必修科目においてもレベル分けを導入することを検討することで、さらに教育効果が高まるよう、快適な学習環境を確保する。

〈４〉国際情報学部

EXP 以外にも、社会からの要請に応えるため、リーダーシップを養成する「WLI」の上級クラスにおいて､社会との連携を重視した教育を展開し､学生が社会人との交流しつつ、企画を立案する機会を増やしていく。

現代文化学部からの移行にともない、引き継いだ制度の教育方法についても課題が生じている。学生が混乱しないよう、今後も毎年の学科別協議会で検証を重ね、学部教務委員会が中心的な役割を果たし、新学部としての制度の固定化を図る。

〈５〉人間科学部

多元心理学科では、まもなく完成年度を迎えるので、ユニット制を充実させることで、幅広い知識を持つ心理の専門家やさまざまな企業で活躍する人材を育成できるようにする

〈６〉薬学部

「薬学 PBL」は教育成果の検証の場でもあるので、学年を拡げて同様の科目を開設することを検討していく。

〈７〉文学研究科

国文学専攻と社会学専攻の淡江大学との交換留学生制度をより充実したものにし、英文学専攻についても、海外の大学院との提携準備を進める。専門的職業人養成については今後も重要性が高まると思われるので、現在の改善成果に満足することなく、「学生の意識調査アンケート」の結果を参考にしながら、３専攻とも充実に向けた具体的な検討を開始する。

〈８〉人間生活学研究科

より高度な専門的職業人を養成するため、周辺自治体との協力を強化することで、臨床心理士になるための実地訓練を充実させていく。

②改善すべき事項

〈１〉大学全体

学生が授業外での学習に積極的に取り組むことができるよう、シラバス「課題／教室外の学習」欄の充実について、大学教務委員会で検討を開始する。公正な成績評価を担保するため、大学教務委員会で成績評価の実態を調査し、科目間で偏りが生じないような仕組みを検討する。

大学自己評価委員会において、大学院にも「教育効果に関する数値目標」を設定することを検討し、大学全体で教育成果の検証ができる体制を整える。

〈２〉国際情報学部

教育における学外交流は、社会連携の一部でもあるため、大学全体の社会連携と結びつけながら、活動の充実を図っていく。

〈３〉文学研究科

『履修要覧』の記載内容を人間生活学研究科と統一するための調整を行う。2014 年度の活動目標には、「（２）学生の研究活動の活性化」を掲げ、「学生の意識調査アンケート」の実施や学生による学外研究発表の促進などを検討蓄積していく（**4-6「文学研究科自己評価委員会活動目標」**）。アンケートについては、具体的な授業内容に関する設問を取り入れることで、単なる意識調査ではなく、授業評価的な側面を強調していく。新たな調査結果については、研究科ＦＤ委員会で検証し、今後のＦＤ活動のあり方を考える材料にする。

〈４〉人間生活学研究科

教育方法に対する検証を継続的に行うために、基本問題検討委員会や研究科ＦＤ委員会

で、新たな取り組みについて検討していく。2014 年度の活動目標には、「（１）学生の授業満足度調査の実施」「（２）学生の学会発表の活性化」を掲げ、教育方法の改善と学生の学会発表促進を図っていく **（4-6「人間生活学研究科自己評価委員会活動目標」）**。特に「学生の意識調査アンケート」は 2009 年度以降実施されていないので、アンケートを再開して、教育方法の改善につなげていく。

４．根拠資料

4-28「教育力　授業サポート BOOK 2013」
4-29「2014 年度シラバス作成について」
4-30『履修要覧 2013 文学部別冊』
4-31「臨時増コマ申請基準」
4-32『2014 年度大学パンフレット』
4-33『金城学院大学論集』社会科学編第 6 巻第 2 号
4-34『金城学院大学論集』社会科学編第 7 巻第 1 号
4-35 日本高等教育開発協会ＨＰ「教授法が大学を変える」
（http://jaed.jp/jaedweb/?q=ja/node/33）
4-36「金城学院大学大学院学則」（既出　資料 1-15）
4-37「金城学院大学大学院長期履修学生規程」
4-38「2013 年度授業評価アンケート」
4-39「2012 年度授業評価アンケート結果（全科目）」
4-40「2013 年度授業評価アンケート結果（全科目）」
4-41「15 週授業と試験期間の設定について」
4-42「同志社女子大学と金城学院大学の単位互換に関する申合わせ」
4-43「同志社女子大学と金城学院大学の交流学生に関する申合わせ」
4-44「学則第 15 条に定める外国の大学又は短期大学に留学して修得した単位の認定基準について」
4-45「2013 年度　高大接続連携授業の実施に関する覚書」
4-46「2013 年度科目評価集計　英語コミュニケーションＡ～Ｆ」
4-47「2013 年度科目評価集計　外国語教育科目」
4-48「総合戦略協議会議題一覧」（既出　資料 1-6）
4-49「2011 年度～2013 年度文学部学科別協議会テーマ一覧」
4-50「2011 年度～2013 年度生活環境学部学科別協議会テーマ一覧」
4-51「2011 年度～2013 年度現代文化学部および国際情報学部学科別協議会テーマ一覧」
4-52「2011 年度～2013 年度人間科学部学科別協議会テーマ一覧」
4-53「2011 年度～2013 年度薬学科別協議会テーマ一覧」
4-54「2012 年度 2 月文学研究科委員会議事録」
4-55「ＦＤ委員会報告（2012 年度大学院文学研究科学生の意識調査アンケート結果報告分析）」
4-56「2009 年度　大学院人間生活学研究科　学生の意識調査報告書」